

「香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学農学部・3年 福本将輝

僕はこのプログラムに参加するまでは旅行を含めて海外に行った経験が無く、香港中文大学での留学が初めての海外での生活になった。これまでは日本語さえ話すことができれば不自由なことは全くなかった。あまり国内でも外国語を使うことはなかった。しかし今回の留学ではたくさん英語や中国語を話し、僕は世界の人々と意思疎通ができる感動を覚え、もっと英語や中国語をたくさん使っているいろいろな人と話してみたいと感じた。中国語は香港中文大学で学習するまでは自己紹介ができるくらいのレベルでありほとんど使える状態ではなかった。ので飲食店やスーパーマーケットなどで必要最低限使うぐらいのことしかできなかったが、それでも習った中国語が通じたときはとても嬉しくて、それが毎日の学習へのモチベーションへと繋がっていった。また、休日に中国の深センへ出かけたとき地下鉄の駅がわからなくなってしまい“station”の単語ぐらいこの国の人でも通じるだろうと思い、“Where is the subway station?”と尋ねたのだが全く通じなかった。それまでは中国語を勉強していたものの英語以外の必要性をあまり実感していなかったが、そのときに英語以外のその国の言語を話すことができることの大切さを痛感した。

僕の専攻は農学の品質評価であり世界各国の地元の人々の美味しさの感覚についてヒアリングできれば自分の研究に活かすことができると考えており、そのためには様々な国の言葉が話せることが大事だと思いその第一歩として中国語ができれば役に立つと思ったので僕はこのプログラムに参加した。しかし実際はどの程度勉強すればそのヒアリングが出来るようになるのか自分でも未知であり、中途半端な知識を身につけるだけに終わってしまうかもしれないという不安もあった。そこで僕は学校の先生に味の表現をたくさん教えてもらった。そして一緒に昼食を何度かとってもらい、その際に先生から習った様々な味を表す単語を使って例えば、この「お米は食感が良くない」「このクリームソースは甘みが大きい」などの昼食の味について会話する練習を行った。最初は中々できなかったが、味や食感を表す単語に特化して勉強することである程度は料理の味について議論が出来るようになった。

今回のプログラムはとても環境が恵まれたものであり、僕は様々な言語を用いてコミュニケーションができる喜びと、外国語を使った味の議論ができるための外国語の学習法を学ぶことができたと思う。